

大学でのサービス・ラーニングにおけるボランティア活動の効果  
— 関連性評定質的分析法による分析結果を手がかりとして —

平田幸男（至学館大学）

**Key Word** 大学教育，サービス・ラーニング，リフレクション，ボランティア活動の効果，関連性評定質的分析法

## 1. 研究の動機と目的

ボランティアなどの地域社会での活動の経験と大学での学術的な学習との融合を目指した教育方法は、サービス・ラーニング（以下、「SL」）と言われる。SLはアメリカで誕生したもので、我が国の高等教育においても導入が進められている。SLではリフレクションが重要視されることから、SLにおけるリフレクション研究も行われている。しかし、村上（2012）は、SLにおけるリフレクション研究の観点が学習面に偏っていて、活動面の観点からの研究がほとんど見あたらないのはバランスを欠いていると指摘する。また、SLにおけるリフレクションの実際の場面では、自分たちの活動がどのような効果を地域や社会に残したのかを考えさせることなしに何を学んだかについて考えさせることは難しいとも指摘している。よって、大学のSLにおいて学生自身が活動の効果を把握することが求められるが、そのためには、活動の効果を適切に解釈・表現する手法が不可欠である。

そこで、本研究は筆者の勤務する大学（以下、「本学」）での実践事例をもとに、大学でのSLにおけるボランティア活動の効果について、関連性評定質的分析法を用いて明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

実践事例となる本学の「人間力総合演習」（以下、「当科目」）は、在学期間中に60時間以上のボランティア活動を課す授業科目である。学生が参加したボランティア活動（以下、「本活動」）は、A県B市Cコミュニティの主催により、2019年7月20日午後B市C公民館で行われた「C子どもチャレンジ大会」（以下、「同大会」）への協力である。

本活動の効果を地域住民の声から分析するため、活動の後日に筆者が同大会実行委員長のD氏（60代男性。以下、「D氏」）D氏に対し、半構造化インタビューを行った。なお、D氏の了承のもと、インタビューをICレコーダーに録音した。インタビューに要した時間は約30分間である。そのインタビューでのD氏の語りが、本事例におけるボランティア活動の効果について分析する対象のデータである。

本活動の効果を分析するにあたり、関連性評定質的分析法を用いた。関連性評定質的分析法は、KJ法に数理的分析を交えた手法でKH法ともよばれており（以下、「KH法」）、臨床心理や看護、教育の分野の研究で用いられているものである。本研究でKH法を用いる理由は、KH法が質的なデータの分析に数量的な分析を取り入れることで、逐語録といった言語的資料をより適切に解釈できるようにした手法であるという点である。本研究では、インタビューでのD氏の語りから本活動の効果を解釈し、その内実を明らかにするため、KH法が適している。

### 3. 研究の内容

#### (1) D氏の語りの要約

KH法における「要約」とは、言語的資料に対するカード布置の過程を通じて、その内容の要点を縮約した上位ラベルを得る段階である。KH法でのカード布置とは、言語的資料のカード化、カードの内容に基づくグループ化、カードグループへのラベル付けという3つの過程を指す。本実践では、33枚のカードが作成された。KH法では、それらのカードから意味的に関連が強く、内容の近い者同士で数枚

表1 カード布置の例

ラベル	カード	内容
L1-3 アイスブレイクが盛り上がり、子どもたちがそのままなりゲームに行けた。	C7	アイスブレイクの時間が長引いたってのは、盛り上がっているなどという解釈で見ている。
	C8	子どもたちがアイスブレイクからゲームにそのままなり行けたってのが一つ。
L1-4 初めて会う子どもたちみんなを上手にまとめながらゲームを進行していた。今まででなかったこと。	C2	けん玉のところで言えば、2人の学生さんが前で指示しながら、みんなをまとめながら進行してすごいなと思った。
	C4	子どもたちはその日に初めて会う。1年生から6年生までいて人それぞれなんで、そのへんを上手にまとめていた。
	C33	今まででなかったことで、子どもたちに非常にまとまりができた。せいまい中でも十分に120人が楽しめた。

まとまったカード群を束ねてグループを構成する。本研究におけるカード布置の例が表1である。Cは各カードを、Lは各ラベルを表している。

表2 カード布置によって得られた上位ラベル

L4 高齢化の中で学生が十分に活躍し、大学と地域のコラボがよい形であった。学生の経験を積むのに生かしながら、学生の意見を取り入れて維持していきたい。	L2-1	高齢化の中で学生が十分に活躍し、大学と地域のコラボがよい形であった。維持していきたい。
	L3-1	初めて会う子どもたちを上手にまとめ、盛り上げて進行していた。ゲームのほかに自分たちで動いてくれて助かった。
	L1-6	ゲームだけでなく、頼んだことに対し、こちらの言わんとするところを理解してすぐに自分たちで動いてくれた。助かった。
	L2-3	また学生に来てもらって、学生の意見を取り入れてやってみたい。うまくいけば成功体験になる。そこまでやりたい。
	L2-4	1年生から3年生が一緒に入って、3年生が全体を見れば、3年間で学べるものが変わってくる。今後の自分のため、見る視点を広げるなどの経験を積むのに生かしてほしい。

そして、本研究における「カード布置」の結果、33枚あったカードから表2の上位ラベルが得られた。

次に、カード布置に表れるカードとラベルとの対応を一覧にした表を作成した（以下、「対応表」）。本研究に

表3 作成した対応表

C \ L	L1-1	L1-2	L1-3	L1-4	L1-5	L1-6	L1-7	L1-8	L1-9	L1-10	L2-1	L2-2	L2-3	L2-4	L3-1	L3-2	L4-1
C1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
C3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
C4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
C5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C6	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1
C7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
C8	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
C9	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1
C10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1
C11	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C12	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C13	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
C14	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
C15	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
C16	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
C17	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
C18	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	1
C19	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	1
C20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1
C21	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C22	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1
C24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1
C25	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1
C26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1
C27	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1
C28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
C29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1
C30	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C31	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1
C32	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
C33	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1

※対応している箇所に色をつけている。

における対応表が表3である。表3では縦に各カード、横に各ラベルをならべ、それぞれが対応している欄に1を記し、対応していないところには0が記されている。KH法ではこの対応表を入力データとして用いて数量化Ⅲ類によって数量的に処理し、カテゴリー（本研究においてはラベルを指す）間の複数次元の軸構造を見出すことで、その関係性をとらえる手がかりを得ることを目指している。

表3の対応表について数量化Ⅲ類による分析を進めたところ、次頁の表4にある軸と数値が得られ

表4 対応表から得られた数値

項目 \ 軸	第1軸	第2軸	第3軸	第4軸
固有値	0.646	0.532	0.333	0.104
単相関係数	0.804	0.73	0.577	0.323
寄与率	33.04	29.98	23.72	13.26
累積寄与率	33.04	63.02	86.75	100

表5 得られたカテゴリー数量

L \ 軸	第1軸	第2軸	第3軸	第4軸
L2-1	0.233	-3.13	0	0.431
L2-2	1.765	0.834	0	2.786
L2-3	-1.12	0.503	-2.59	0.202
L2-4	-1.12	0.503	2.266	0.202
L3-1	1.589	0.7	0	-1.57
L3-2	-1.12	0.503	0	0.202
L4	0.068	-0.2	0	-0.34

※各軸での対比的な数値に色をつけている。

た。高橋（2005）によれば、表4より、第2軸までに対応する累積寄与率が60%以上であること、かつ第2軸までに対応する単相関係数が0.3以上であることから、数量化Ⅲ類による処理が適切に行われていると判断できる。本研究では、単相関係数が0.3以上ある第4軸まで全てを用いて以後の分析を進めた。

そして、数量化Ⅲ類では、この単相関係数をもとに各ラベルの軸上の位置がカテゴリー数量として算出される。その数量の一覧が表5である。

なお、それぞれの軸において対比的に数量が与えられているラベルは、D氏の語りにおける中心的な内容であるとともに、その軸構造を見出す上で意味を持つラベルである。本研究では、表5よりL2-1、L2-2、L2-3、L2-4、L3-1、L3-2の6つのラベルが得られた。

## (2) D氏の語りの解釈

KH法の「解釈」は、前節の「要約」で得られたラベルを基本単位として、そのラベルを互いに結び付けることのできる類似性以外の基準（推移性・連動性・限定性・対比性など）を導入して解釈することである。

本研究で得られた4つの軸の「解釈」および、その解釈をもとに、D氏の語りの中心的な

内容を構造的に配置し、本活動の効果についてまとめたものが図1である。

図1より、本活動において学生は上手に子どもたちをまとめてアイスブレイクを進行し、また依頼された

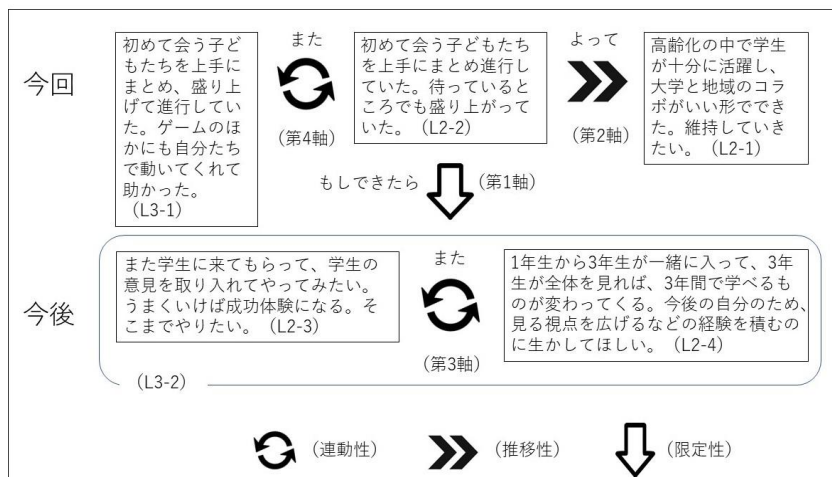


図1 本活動の効果のまとめ

こと以外のことにも自分から動くなど十分に活躍した。よって、D氏は大学と地域のコラボがうまくいき今後も維持したいと思った。そして、もしできたらまた学生に来てもらい、学生の意見を取り入れてやってみたり、学生が見る視点を広げる経験を積めるように生かしたりしたいと考えた。

つまり、本活動の効果として、今回の学生の活躍そのものだけでなく、その学生の活躍をふまえて、D氏が今後の同大会における大学と地域の連携について新たな展望をもつに至ったことがわかる。

#### 4. 成果と課題

本研究の成果として、KH法を用いたことにより、本活動における効果について要約し構造的に把握することができた。したがって、本研究は大学でのSLにおけるボランティア活動の効果をいかに把握するか、その分析手法の1つについて具体的な実践をもって示した。なお、この分析結果を参加した学生に示したところ、学生は自分たちの活動の手応えを感じていた様子であった。そして同大会に「また来年も参加して、さらに活躍したい。」という声が多く聞かれた。さらに後日行われたCコミュニティの反省会においてもこの図を資料にして説明したところ、「確かに。とてもわかりやすい。」という感想を得た。

一方、課題としては以下の2点が挙げられる。第1は分析データについてである。本研究ではD氏のインタビューでの語りのみだったが、活動に関わった地域住民の声という場合、他の運営者や参加した子どもたちなど多様な対象から収集すべきである。また、収集方法についてインタビュー以外の方法も考えられる。第2は分析者についてである。本研究では教員である筆者が情報を収集し分析したが、学生自身が活動の効果を省察的に思考するリフレクションを考える場合、学生が情報収集の主体者になるべきである。むしろKH法による分析を学生が行えるように支援し、学生自身で活動の効果を確かめるようにはできないだろうか。そうすることでどのような教育効果があるのだろうか。これは当科目のカリキュラム・マネジメントにも関わる。大学でのSLにおいてボランティア活動の効果を把握しそれをふまえてリフレクションを行う上で、学生がどの対象に対しどのような情報を集めていかに分析するか、また稿を改めて実践研究を行うこととしたい。

なお、この2点の課題の改善は、当科目における学生のより深い学びを実現する上でも重要であろう。

#### <注>

本研究において数量化Ⅲ類の分析にあたり使用したソフトは、柳井久江、2005、『エクセル統計 実用多変量解析編』オーエムエス出版に付録されている、「エクセルアドインソフト Mulset1」である。

#### <参考・引用文献>

村上徹也、2012、「サービスマーケティングにおけるリフレクション研究の到達点」、『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』第20号、8-18頁。

葛西俊治、2008、「関連性評定質的分析による逐語研究 -その基本的な考え方と分析の実際-」、『札幌学院大学人文学会紀要』第83号、61-100頁。

高橋信、2005、『Excelで学ぶコレスポンデンス分析』オーム社、187-189頁。